

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
I. 理念に基づく運営	11
1. 理念の共有	2
2. 地域との支えあい	1
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	3
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	2
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援	2
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	6
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	11
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	30

事業所番号	3290400153
法人名	有限会社 楽舎
事業所名	認知症高齢者グループホーム 宇賀の里 楽舎
訪問調査日	平成 20 年 12 月 19 日
評価確定日	平成 21 年 1 月 15 日
評価機関名	株式会社 ワールド測量設計

○項目番号について

外部評価は30項目です。

「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。

「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。

番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

[取り組みの事実]

ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

[取り組みを期待したい項目]

確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

[取り組みを期待したい内容]

「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家族 = 家族に限定しています。

運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者（経営者と同義）を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

1. 評価結果概要表

作成日 平成 20年 12月 25日

【評価実施概要】

事業所番号	3290400153		
法人名	有限会社 楽舎		
事業所名	認知症高齢者グループホーム 宇賀の里 楽舎		
所在地	島根県出雲市奥宇賀町23番地10 (電話) 0853-63-7373		
評価機関名	株式会社 ワールド測量設計		
所在地	出雲市荻苅町274-2		
訪問調査日	平成 20年 12月 19日	評価確定日	平成 21年 1月 15日

【情報提供票より】(20年 12月 1日事業所記入)

開設年月日	平成 20年 1月 16日		
ユニット数	1ユニット	利用定員数計	9人
職員数	9人	常勤	7人, 非常勤 2人, 常勤換算 人

(2) 建物概要

建物構造	木造	造り
	1階建ての	～ 1階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	41,000円	その他の経費(月額)	水道光熱費 18,000円
敷金	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	
食材料費	朝食	400円	昼食 400円
	夕食	400円	おやつ 0円
	または1日当たり	1,200円	

(4) 利用者の概要(12月1日現在)

利用者人数	9名	男性	2名	女性	7名
要介護1	1名	要介護2	1名		
要介護3	1名	要介護4	5名		
要介護5	1名	要支援2	0名		
年齢	平均 82.8歳	最低	68歳	最高	94歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	牧野内科医院 ・ わかば歯科
---------	----------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

日本海漁港に通じる道沿いの、山や田んぼに囲まれた環境にあり、大きな梁の枠組みが見える木造の建物からは懐かしさが感じられる。『生きる』をテーマに、特に“食”と“歩くこと”をケアプランの重点に「音楽療法」「アニマルセラピー」「フラワーアレンジメント」などの目的、効果等を十分認識した上で、日々の楽しみの中に取り込んでいる。又、職員のやる気を出させる為、努力と成果に対して評価を行うシステム(自己評価と考課)が構築され、実施されている。研修や行事報告書では、評価や反省が必ず明記されており、日々のジョブオントレーニングが行われている。各種の記録用紙は独自に工夫を重ね、毎日の職員の評価や気づきがプラン作成や見直しに反映されている。一方的なケアでなく、常に利用者や家族を巻き込みながら、職員は業務の中に自分でやりがいや喜びをみつけている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	初回の外部評価である。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	事業所としては初めての外部評価であったが、同法人既存のGHから異動してきた職員もおり、これまでの評価を参考にサービスの向上に取り組んでいる。今回の自己評価は職員が分担して書き込んだ評価票をもとに、全職員で話し合い作り上げた。
重点項目③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	2ヶ月に1回の運営推進会議では、メンバーは最低限固定しておき、あとは近所の方やボランティアの方など幅広く参加して頂いて、活発な意見交換をしている。会議には毎回、法人役員も参加して意見や要望を直接聞いて現状の把握に努めている。又、理念や支援方針の説明を行う事により、理解を深める努力をしている。
重点項目④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	新聞「こんにちは楽舎です」の送付や、毎月その方の担当職員が、ご家族宛に手紙を書いて、日々の様子をお知らせしている。笹巻作りや七夕会などの行事には家族を案内し、家族も参加する『1年間ありがとう会』では、各利用者に対して具体的な内容を明記した『感謝状』を渡すなど、利用者と共に生活している様子が、家族にも十分理解できるように工夫している。日常的に、何をすることも一方的な関わりではなく、利用者や家族をまきこんでいる。良い面、悪い面を全て家族にも知って貰い、職員が親身になって一緒に考え、ホーム全体が家族のように感じられる。これまで、目立った苦情や要望はなく、アンケート結果からも、ほぼ満足な状態で生活されている様子が伺える。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	開所1年未満であるが、既に法人として地域に根付いており、地区の福祉活動の一環として多くの行事に、利用者と一緒に参加している。小中学生や地域ボランティアとの交流も日常的で、朝は小学生の登校に合わせ、ベランダから手を振っての見送りを日課とし、利用者が積極的に地域に溶け込める工夫をしている。

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	掲げてある2項目の理念は、開所時にスタッフと共に考えたものである。運営母体である楽舎の共通理念に基づき、地域の中での暮らしを支えるための「愛、家族、絆のかけはしに」を加えた独自の理念となっている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	「カゼをひかないで、みんなで元気に年越しするぞ!」といった毎月の目標を決め、利用者と一緒に取り組んでいる。法人、事業所理念とスタッフの考えた月の目標を毎日朝礼の時に唱和し、意識の共有を図っている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	開所1年未満であるが、既に法人として地域に根付いており、地区の福祉活動の一環として多くの行事に、利用者と一緒に参加している。小中学生や地域ボランティアとの交流も日常的で、朝は小学生の登校に合わせ、ベランダから手を振っての見送りを日課とし、利用者が積極的に地域に溶け込める工夫をしている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	事業所としては初めての外部評価であったが、同法人既存のGHから異動してきた職員もおり、これまでの評価を参考にサービスの向上に取り組んでいる。今回の自己評価は職員が分担して書き込んだ評価票をもとに、全職員で話し合い作り上げた。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回の運営推進会議では、メンバーは最低限固定しておき、あとは近所の方やボランティアの方など幅広く参加して頂いて、活発な意見交換をしている。会議には毎回、法人役員も参加して意見や要望を直接聞いて現状の把握に努めている。又、理念や支援方針の説明を行う事により、理解を深める努力をしている。		
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市のグループホーム協議会や地域の小規模連絡会、研修会等に参加し、相談の機会を設けている。法人として赤い羽根共同募金には毎年職員が街頭に立っている。又、福祉フェスティバルでは、利用者と一緒にステージに立ち、音楽療法、フラワーアレンジメントなど日常の活動を通して認知症予防やグループホームの啓発に協力している。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	新聞「こんにちは楽舎です」の送付や、毎月その方の担当職員が、ご家族宛に手紙を書いて、日々の様子をお知らせしている。笹巻作りや七夕会などの行事には家族を案内し、家族も参加する『1年間ありがとう会』では、各利用者に対して具体的な内容を明記した『感謝状』を渡すなど、利用者と共に生活している様子が、家族にも十分理解できるように工夫している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常が一方的なケアにならないように、常に利用者や家族をまきこんでいる。利用者のあらゆる面を全て家族に伝え、職員が親身になって一緒に考えていく、ホーム全体が家族のように感じられる。これまで、目立った苦情や要望はなく、アンケート結果からも、ほぼ満足な状態で生活されている様子が伺える。	○	苦情解決の仕組みの中で、第三者委員に“楽舎代表取締役”と“家族会会長”の2名が任命されているが、施設及び利用者の代表としての調停役的な立場であり、本来利害関係のない立場としての第三者委員としては好ましくないと考えられます。又、現在「重要事項説明書」は玄関に掲示されていますが、苦情受け付け関係及び個人情報保護に関する文書も掲示しておくことをお勧めします。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	管理者が11月末に寿退社することになり、利用者とスタッフが一緒に企画や準備をしてお別れ会を行った。利用者も心から感謝と喜びの言葉を下さり、とても暖かい会になった。馴染みの関係を大切にしており、それ以外は職員の離職や異動はない。家族にもきちんと報告、あいさつされており不安はない。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月第一火曜日に法人全体で研修会をしており、パート職員も含め熱心に参加している。職員のやる気を出させる為、努力と成果に対して評価を行うシステム（自己評価と考課）が構築され、実施されている。職員の資格取得に対する意欲が高い。外部研修会の報告を内部研修会の中で行う事により、情報の共有化と職員の能力向上に努めている。研修や行事報告書では、評価や反省が必ず明記されており、日々のジョブオントレーニングが行われている。職員は業務の中に自分でやりがいや喜びをみつけている。	○	運営者をはじめ、職員の育成の重要性を十分認識し、計画性をもって工夫をしている。しかし、管理者は交代したばかりであり、施設長不在時の判断や緊急対応等にはやや不安が残る。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に参加している。2ヶ月に1回、研修会で知り合った管理者やスタッフと意見交換もしている。同法人の事業所との連携は勿論、市内の他事業所と職員の交換研修も行うなど、積極的に取り組んでいる。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入所前に見学して頂いたり、お試し入所や同法人敷地内にある認知症型デイサービスを利用して頂き慣れて頂く、何回も会いに行くなど、その方に合った対応をして、本人や家族が納得した上で入所につなげている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	生活全般に、計画の段階から、利用者と一緒に話し合い、職員も利用者も、それぞれが得意な事、出来る事を分担している。困る事や問題がおきても、職員だけでなく、本人や他の利用者も含め話し合う事で、みんなの理解や協力を得て、互いに支え、励ましあって生活している。		良い面だけでなく、困った面も、ごまかすことなく本人や家族、他の利用者みんなで話をしている。年末には、家族も招待し「ありがとう会」を開き、利用者一人一人に、1年間の感謝の言葉を述べ感謝状を贈っている。今後も利用者の誇りと自信を取り戻し、家族との絆を修復する努力を続けていきたい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所前に担当者会議を行い、入居前の情報収集をしっかり行い、入居後の生活を見極めている。事業所で使う書式は素人にもわかるような言葉で表現し、利用者の意向や思い、現状や問題がイメージしやすくなっており、どの職員もポイントをおさえ、きちんと記録を残している。誰が見ても解り易いことで、職員や家族との情報共有もスムーズである。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	アセスメントシートやケアプラン用紙、介護録は何度も改善して出来上がった独自の書式を使っている。毎日の介護録は各ページに長期目標と短期目標が記されており、いつも意識して関わる事が出来る。又、その方の視点のポイントが3つ書かれており、毎日◎○△で評価出来る書式になっている。毎日の職員の評価や気づきがプラン作成や見直しに反映するシステムを工夫、実践されている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	入居後、慣れるまでの2週間から1ヶ月は、場所と人になれる為の暫定プランをたてて注意深く見守っている。入居後2週間は、24時間シートを使って排泄チェックをして、排泄パターンの把握にも力を入れている。居室担当者を中心に定期的にカンファレンスを行い、計画作成者が見直したプランを作成している。		入居後、慣れるまでの不安な時期に、職員が利用者の気持ちに寄り添い、共感し、十分に関わりを持つ事で、利用者は落ち着きを取り戻し、安らかな生活を取り戻していわれている。
3. 多機能性を活かした柔軟な支援(事業所及び法人関連事業の多機能性の活用)					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	逆デイサービス（日中の自宅への送迎）や、希望する家族に対しては宿泊も可能な状態にし、家族とのつながりが途切れないよう援助している。又、その方の地域の運動会に参加したり、故郷への墓参りに同伴するなど柔軟な支援を行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域支援との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	近隣からの入居者が多く、入居前からのかかりつけ医を継続されている。専門医にもかかっている方もあり、受診の際は、文書で情報提供するなど連携をとっている。体調の変化があった場合は看護師や管理者に報告し、主治医の指示を仰ぐ。かかりつけ医や搬送先一覧表が準備されている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	指針やマニュアルは準備されているが、開所1年未満で、これまでケースはない。家族へは入所時にきちんと退所の基準について説明している。法人内に5人の看護師がおり、協働体制も整っている。ターミナルケアにおいては国の指針で、介護職員に出来ない処置もあり、介護職、看護職に分け、わかりやすく一覧表を作っている。	○	国の指針を見極めながら、出来る事は行っていく考えである。それにあわせ、スタッフのレベル向上に努めたいと考えている。看護職員を講師に職員の内部研修も期待できる。又、感染症防止対策マニュアルは整備されているが、内部研修等で感染症発生時の対応方法等について、より具体的な講習等の実施が望まれます。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	利用者と一緒に、職員の言葉遣いや敬語について話し合いを行い、丁寧な言葉を望む方、出雲弁で話して欲しい方など、各々が希望される言葉掛けをしている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	『生きる』をテーマに、特に“食”と“歩くこと”をケアプランの重点に、本人の意思を尊重しながら、共に楽しく生きる努力をしている。1日3～5分の立位訓練や、尿漏れ防止に爪先立ちトレーニングを行うなど、高齢で車椅子の方が、少しでも職員の負担を減らせると意欲を持ってリハビリを続け好結果を得ていた。又、色々な高さの物干し竿を準備するなど、皆が活躍できるよう、あらゆる場面作りをしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	全職員が交代で調理を担当している。可能な限り、食事の献立作り、買い物から片付けまで、利用者と一緒に楽しみながら行っている。又、食事が美味しく食べれるように毎食後の口腔ケアにも力を入れている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	利用者の希望と体調に応じて入浴している。冬場は浴室や脱衣所を暖め、温度差には十分気を配っている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	特技、能力に応じた係を決めており、今回の訪問時には、調査員の出迎えや見送りを職員と一緒に対応してもらえた。又、昼食時には毛筆でお品書き作成してもらい、国の指定技能としての正月凧を疲労して頂いた。散歩、カラオケ、料理など個々人の趣味を十分把握し、楽しみや気晴らしに対する支援を行っている。「音楽療法」「アニマルセラピー」「フラワーアレンジメント」などの目的、効果等を十分認識した上で、日々の楽しみの中に取り込んでいる。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさず、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	毎日敷地内の散歩が日課の方もいる。職員と一緒に近くのスーパーに買い物に行き、自分で支払いされる方もいる。少人数での季節ごとの外出、日々の外出支援も頻繁に行っている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	交通量のある道路に面して建っているが、日中は玄関に鍵を掛けず、チャイムが鳴り常にホールや事務所に職員がいて目配りしている。1名の利用者は居室の窓から出ようとして、歩行も不安定なため窓に鍵を掛けている。この場合もヒヤリハット事例として報告書に記し、他の職員のコメントを求めるなど、共通認識を持った上で対応方法の協議と決定を行い、家族への連絡も行っている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	法人全体での合同避難訓練を行った際の意見交換では、消防職員との具体的かつ現実的な意見交換が行われており、また訓練記録の中の総括・反省の項目も具体的な内容であり、真剣な取り組みの姿勢が伺える。災害時のみならず緊急時等にはお互い助け合えるという意味では、同敷地内での3施設の存在は大きな利点となっている。		
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や飲水量はチェックして看護師に伝えている。“食”のケアには重点をおいており、全員について十分なアセスメントを行い、ケアプランにつなげ、定期的に評価をしている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	木造造りでホールは大きな梁の枠組みが見え懐かしさが感じられる。道路に面して木製の広いベランダがあり、お茶を飲んだり、通る方に手を振るなど交流の場となっている。ホールには大きなテレビの前にコタツが置かれ、皆のくつろぎの場である。トイレも開放的でシャワーを設置し、逆に風呂場には便座を設置するなど、利用者の状態を考慮に入れた対応が可能なように配慮されている。又、“臭いのない施設”をセールスポイントに、きめ細かな掃除を行っている。	○	季節がらか、建物の外回りがやや殺風景に思えます。プランターの花や、道具など生活感ある風景で、通る方の目をひきつけて頂きたい。
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に決まった家具は無い。利用者が自宅で使っていた馴染んだ家具や大事な物を持ち込んで頂き安定した生活の場の提供を心掛けている。ベッドやタンス、鏡台、コタツや冷蔵庫などが置かれた個性ある部屋となっている。		